

ふるさとのお話

私財を投げうって沼地を開発

高橋勇吉の

天文堀



語ってくれた人
勇吉の孫にあたる
高橋しのさん(75歳)
大野町

昔、沼川から浮島にかけての一带は沼地でした。ひとたび大雨が降ると、田は湖のようになり、附近の人々は大変悩まされました。

大野新田に住む高橋勇吉は、この沼地に天文堀という排水路を造ろう——と考えたのです。

大雨のたびに飢饉

江戸時代も終わりころ、天保7年(1836年)全国に大飢饉が起りました。元吉原でも秋の大雨で大野・松田中の三新田の稲は全滅。食べ物もなく死人も出たほどです。

この時、勇吉32歳。三新田に排水堀を造ることを考え、村人や役人に相談したが、相手にされませんでした。勇吉は、ひまを作っては土手ののぼり、三新田をながめ排水堀の方法を、夜ごと日ごと考えたのです。

村人の中には、勇吉をきちがい扱いする人もいました。



高橋勇吉の碑

牢屋に入れられ許可が

9年の歳月がたち、またも大飢饉。勇吉は江戸に向い、工事の願いを直接奉行所に出そうとしたところ、役人に取りおさえられ、牢屋に入れられてしまったのです。当時、村人が奉行所に直接願い出ることは禁止されていました。何回となく取調べられた結果、やっと勇吉の考えがわかって、工事の許可が出ました。

勇吉は、自分の田や畑、財産をほとんど売払い、排水堀の資金に充て、嘉永5年(1852年)三新田に排水堀を完成させます。

勇吉が三新田に排水堀を造ろうと考えだした時から、実に15年の歳月がかかったのです。人々は、この堀を天文堀と名付けました。

地名の由来

浮島



浮島工業団地東側

明治22年3月根古屋村・井出村・石川村・平沼村・船津村・西船津村・境村が合併して、浮島村となりました。この村の人達は沼の恩恵を受けて生きてきたのだから、村名を浮島としたものでしょう。

浮島沼は縄文時代には淡水湖になりました。東海道が沼の北側を通った平安時代から、浮島沼の名が文献に見られ、歌や詩に作られました。

郷土の遺跡

人々の生活

天間沢遺跡②

縄文時代の人々は、山や川・草・木など、種々の物に精霊が宿ると考えていたようです。なかでも食べ物を貯蔵し、煮炊きする土器に悪霊が宿ることを嫌いました。もともとは、土器を作るとき表面を固めるための縄目などが、しだいに悪霊よけのための文様に変化していったようです。

天間沢遺跡からは、このような文様のもつとも発達した縄文時代中期(今からおよそ4,500年前ころ)の土器が多く出土しています。

これらの中には、ササ竹を半裁しこの先端で色々の幾何学的な文様を画き、さらにヘビやトカゲを何尾も浮き彫りしている土器もあります。

この顔面把手もそのような飾られた土器の口縁に付いていた土面であ

顔面把手

り、悪霊よけのための主体となった土器のようです。



勝坂式土器